

(五) 発情オンパレード

山羊の二度目の発情が、予告通り 3 週間目に来た。生き物であるからには発情し、交合し、繁殖するのが自然の理である。人間とても例外ではない。ただ雌山羊の場合、やかましく雄を呼ぶというだけである。女房は諦めて種つけをしよう、と亭主に提案した。団地住まいでこれ以上やかましいのをほうっておくわけにはいかない。

それにしてもねえと、ためらう亭主に効く一言。

「子山羊はカワイイと思うよ、ね？」

とたんに亭主の目尻が下がった。

「そりゃあ、カワイイだろうねえ！」

よし、決定。

女房は近所で 1 トントラックを借り、山羊を荷台にくくりつけて農家に連れて行く。もの好きな女房だが今までトラックは運転したことがない。エイヤ、と気張ってねじり鉢巻を締める心境である。女房が交差点でギアを切り替えていると、山羊は鳴きわめくは、トラックはでかいはで、心臓が口から飛び出そうである。

種つけはごくアッサリと終わった。草食動物であるから、長々やっていた日には肉食動物に襲われるのがオチだろう。メスの発情した匂いがかぐと、オスはすぐにその気になって後ろからのしかかり、動物に強姦はない、というのを女房は納得した。この点は動物のほうが人間より上等ではないか。人間は性的結合をイヤがる相手にも強制することがあるが、動物はその気になっている相手しか対象にしないのだから。

帰りの運転は慣れて、鼻歌混じり。

少し前に、夫婦は雌の野良犬を飼い始めていた。やかましくて女房の命令をまらできなかった柴犬がいなくなって、ああせいせいしたと喜ぶ女房に、亭主が酒の肴に好物の焼き豆腐をつつきながら、さみしいねえ、と言ったのである。

「犬は遊んでくれるけど、猫も山羊も遊んではくれないからねえ」

女房は一瞬、飯がのどに詰まりかけた。自家製の白菜漬けを急いで口にほうりこみ、一緒に飯をゴクンとのみこんでから、マジマジと亭主の顔を見た。50 男は本気である。

そのころ近所をウロウロしていたのが、肋骨が見えるほど衰れに痩せこけ、おどおどとした目つきの、狐顔の犬だった。声を聞いたことがないほどおとなしいのが女房の気に入った。やかましいのはもうコリゴリである。それに、1 日 15 分の散歩はどうも体にいいようだった。ウエストが細くなったのである。名づけて「犬ダイエット」。

よし、じゃあこのおとなしそうな子を飼ってみよう。

柴犬は元気いっぱいグイグイ綱を引っ張ったものだが、今度の狐顔はまるで引っ張らず、空気だけかと思うほど軽い。女の子で狐顔のきっちゃん、幸運の吉（きち）と名をつけた。

犬小屋は柴犬のいた藁（わら）小屋である。初め山羊小屋に入れてみたのだが、山羊が怒って頭突きをくらわした。小さな犬はふっとばされてキャンと鳴いた。ああ声は出るんだと女房は喜んだが、三度頭突きをくらわされるに至って、衰れをもよおし、わら小屋が犬小屋となったのである。

が、思いもかけないことがおこった。

吉が発情期に入ったのである。

雄の野良犬がこれでもかというほど寄ってきて、乗っかっているのを女房が追い払うハメになった。今度こそ避妊をせねば、と安い獣医を捜して電話をかけ、どこかと場所を聞くと、留守番のばあ様が

「神社の前にイベスヤってあっでしょう。その下さ降りてったとこなんですけど」

「は？」

「あのねえ、神社の前さイベスヤさん、とかナビヤさん、とかって店があるっしよう」

わかった。

イベスヤは「恵比寿屋」、ナビヤは「なべ屋」だ。

茨城弁はイの段とエの段が逆転する。

食堂で「えびフライ1つ」は「いびフライ1つ」になって、慣れないものは「指フライ」かとギョツとする。池をエキ、駅をイケと発音するのはよそ者にとって混乱の元だ。「イノグあります」と文房具屋に書いてあるのは「絵の具あります」の意味だ。ご丁寧に発音通り字を書いている。同様に小学1年生は連絡帳に「あした『えろいんぴつ』をもってくる」と書く。まさかエロいものではなく、「色鉛筆」である。

カタカナ英語まで訛（なま）って、小学校の入学式では主任さんが必ず「ペーテーエー会長挨拶！」と気張って言うのに女房は椅子から滑り落ちそうになり、釣堀の看板にフェッシングパークと大書してあったのには、そこから目が離れなくて車をぶつけそうになった。

サウナに行くとばあ様たちが「おめえ、今日どうやって帰んでえ？」「今日はよ、イリコが迎えに来るんでえ」と話している。たぶん「イリコ」は「孫のエリコちゃん」だ。しかし山口県でイリコは煮干しの意味である。孫がイリコなら親は鰯（いわし）かい、と女房はひとり吹き出しそうなのをこらえる。

息子の同級生が祖父母宅へ行き、ばあ様が「ええい、このへえめが！」と怒るので「ばあちゃん、『へえめ』って何？」と尋ねると、「はいだよ、はい！」と怒鳴られ、「灰!？」ともう一度目を剥（む）いた。茨城弁では蠅（はえ）を「はい」と言うだけでなく、憎たらしい時には「へえめ」、蚊を「かあめ」とも呼ぶ。犬に吠えられて「この犬め！」と言うのと同じである。

今度蠅や蚊がブンブンうるさい時、口に出して言ってみなさい。

「このへえめが！」

「ええい、かあめ！」

実感があるから。

獣医の予定は詰まっていて、避妊手術は1週間待てと言う。しょうがないからフェロモンをふりまく雌犬を2階のベランダに隔離し、女房は朝晩抱きかかえて降ろしては散歩させるハメになった。

そこへ、ある夕方、庭を犬が走っている。女房は目を疑った。犬の大きさも、毛色にも、見覚えがある。首輪も、女房が買ってやった首輪と同じである。まさか、と思いながら、呼ぶと来る。鎖もつけさせる。半信半疑で近所の人に見せると「まちがない、あの犬だよ。ジョンだよ。え、どうしたの？ 貰われていったんじゃないの？」と尋ねられる。

「帰ってきたのよ！ 40 キロを！」

「え、まさか！」

女房はへたへたと坐りこみそうになった。せつかく追い出したと思ったのに！

しかも発情していて、吉に乗っかろうとする。かたっぱしから寄ってくる野良犬には「俺の縄張りから出て行け」とえらい勢いで吠えかかる。「おとなしい、いい犬ですよ」と老夫婦に進呈したのだが、おとなしくはない、あの野郎嘘をついた、と愛想をつかさ、ソロツと戻しに来られたか。あるいは発情して興奮したジョンが脱走して、そのまま40キロを駆け戻ったか。

「この子はウチを選んだんだよ」亭主は満足げに言う。

女房は満足どころか、堪忍袋の緒が全部切れて、心中沸々（ふつふつ）パンパンと沸騰し続けている。山羊と雌犬の発情でいかげんカリカリ来ているところへ、放蕩息子の帰還であった。散歩も雌犬とは別に行かなければいけない。去勢手術もせねばならない。女房の目は吊り上り、当り散らされる実の子どもはいい迷惑である。

もう何にもないよね？

女房は考える。この女房、どういうわけかトラブルが向こうから寄ってくる。アメリカに亭主と4人の子といた時には、たった1年の間に下の息子の耳の手術、車の事故、女房の四度目の骨折と入院手術、女房の裁判所行き、亭主の交通事故と救急車での搬送、上の娘の湖転落、自転車盗難、とテンヤワンヤで、イタリアに4年半いた時には、車の事故四度、すりの被害、下の息子の交通事故と救急車、女房の脱臼、五度目の骨折、乳がんの治療と二度の入院手術、とこれまた盛りだくさんだった。

日本語でもイタリア語でも、二度あることは三度ある、と言う。英語では、雨が降る時やいつも土砂降り。

動物トラブルは、もう、ないよね？

しかし。

やっぱりあった。

捨て犬である。まことに可愛らしい茶と白の仔犬で、掌にチョココンと乗る。

「可哀そうだよ、かあさん、餌やらないの？」

「そう思うならアンタがやんなさい、かあさんはもう知らないっ！」

しかし3日目にはさすがに見かねて女房は餌をめぐんでやる。とうとう動物の数が人間と同じ6匹になってしまった。動物園の開園である。

幸い仔犬は1週間ほどで貰われていった。残りの2匹の犬は、平日の朝晩は女房と子どもたちが散歩に連れて行き、週末は亭主が行く。

ジョンは、ある日散歩で寛大な亭主に鎖を放してもらったところ、すぐさま山羊にとびかかって血が出るほど咬みつき、激怒した亭主と女房にしこたま蹴りをくらってから、やっと女房の言うことをきくようになった。

それでも去勢手術からの帰り、痛くて気が立っている時のジョンは、おとなしく車に乗ろうとしない。短期で乱暴な女房に手を振り上げられれば、ジョンは咬みつこうと鼻に皺をよせ、歯茎をむき出しにして、こんな痛い目にあわせた張本人の女房に怒る。傍を小学生の一団が通りかかったもので、その前で女房が奥の手の蹴りを出すわけにもいかず、怒りと悔しさで湯気を立てながら犬を睨（にら）んでいると、獣医のところのばあ様がヒョコヒョコと近づき、「あんた、ホラ、車に乗るんだってよ」と声をかけたたん、ジョンはサッと車に乗った。

なんでこいつはわたしの言うことはきかないくせに、ばあ様どもの言うことばかりよくきくんだ！

沸騰したやかんの蓋がカタカタなるごとく女房がカッカきいていると、中学生の娘が、そりゃ最初の飼い主がばあ様だったからじゃん、と得意げに謎をといてみせる。

女房からすると、それほどには彼女と歳の差があったようには思えないのだが。



吉（きち）

雪

ジョン

2匹の犬は女房の顔を見れば尻尾を振り、女房が手を振ればいっそう激しく尻尾を振る。

可愛いじゃないか。

亭主が目を細める。

ふん、と女房が鼻を鳴らす。まだジョンは誰か欲しい人にくれてやるつもりなのだ。写真を撮り、「飼い主募集中」のビラをつくっては、近所の商店に貼らせてもらう。

「何、貰われてもまた戻ってくるさ。ジョンはあんたが好きなんだよ」と亭主が笑う。

いっぽう山羊は冬、寒いもので外の草を食べに連れ出してもらえなくなった。近所の白菜畑に残された売りものにならない白菜と、牛の配合飼料で暮らしている。時々檻の中で暴れまわったり、イナバウアーのように首を後ろにそらせたりしている。亭主名づけて山羊バウアー。



チヨコ

山羊や犬を触った後で猫を撫でると、その毛の柔らかいこと、小さな頭蓋骨の華奢なこと、吠えないこと、手がかからなくて可愛いことといったらない。

山羊より犬より、猫が一番可愛いよ、ね？